かささぎ 通信 第63号

2017年 12月 8日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一七年十一月の「森三郎の作品を読む会」では、森三郎「鐘」（『赤い鳥』昭和6年10月号）と、森銑三「鐘のたましひ」（『森銑三著作集続編』第十六巻所収）他の作品の読み比べをしました。

また、「鐘」の原典の作者・小泉八雲について書かれた森銑三の作品を読みました。

「森三郎の作品を読む会」で初めて森三郎のこの「鐘」を読んだ時には分かりませんでしたが、その後、この話は兄・森銑三の「鐘のたましひ」（初出『帝国民』大正9年4月号）を元に、『赤い鳥』の読者の子どもに向けて書き直したものだということが分かりました。

しかも、『帝国民』に載った銑三の「鐘のたましひ」の文章末には「―SOME CHINESE GOSTS より―」と書かれていて、ラフカディオ・ヘルン（小泉八雲）の『中国怪談集』の中の話だと分かりました。

そこで今回は森三郎の「鐘」、森銑三の「鐘のたましひ」、そして平井呈一訳の「大鐘の霊」（『中国怪談集他』恒文社、一九七六年）の三作を読み比べてみました。

大鐘を造ることを皇帝から命じられたが二度までも失敗した父親を案じて娘が占い師に占ってもらう場面があります。平井訳では娘は自分の所持している宝石を売り払い、占星師に大枚の金を支払って父を救う方法を教えてもらいます。銑三の「鐘のたましひ」では「そつと自分の髪飾りを売り払ひ、その金を持って・・・おあしをすつかり出して」占ってもらいます。三郎の「鐘」では「じぶんの小さな髪飾りをはづして、それをお礼に出して」占ってもらいます。鈴木淳の挿絵の幼い少女の姿と相まって、三郎の話の少女は「幼いながら」父親の身によくないことが起こるのではと案じている様子がよく分かります。

また、娘が「お父さまのおために。」と白銀色のやけ金の中へ飛び込んだ後の、父の行動をどのように表現しているかに着目したいというメンバーの声もありました。八雲の原作では Then the father of Ko-Ngai (中略) would have leaped in after her, となっていますが、平井訳では「そのとき珂愛の父は、（中略）自分も娘のあとから飛び入ろうとするのを」、銑三訳は「其時こうないのお父さんは、（中略）娘の後から飛び込まうとしましたが、」となっているのに対し、三郎の話では「ンラナイのお父様は、（中略）ンラナイをつかまへるために、すぐあとからとび下りやうとしたのですが、」となっています。原書にも銑三訳にもない「ンラナイをつかまへるために、」という説明を加えることで、父親の行動の意味を子どもたちにも理解させ、この物語の悲惨な結末を子どもたちにも受け入れやすくしていると思われます。

森三郎の作品が『赤い鳥』に掲載されるようになった最初の年である一九三一（昭和六）年には、森三郎は兄・森銑三の影響で小泉八雲の原典に基づく作品や日本の古典に話材を求めた作品を続けて発表しています。しかし、細かく読んで見ると、そこには『赤い鳥』の読者層の子どもたちに色々なお話を紹介したいという思いと、そのために森三郎らしい解釈で物語を構築したいという思いとがあると考えられます。このことについては会誌『かささぎ』第3号（本年十二月発行）の拙稿「森三郎童話の原典・話材を探る」でも述べています。

このあと「読む会」では森銑三が書いた、『偉人暦』（大正13年）の「九月二十六日 小泉八雲」と『赤い鳥』昭和2年6月号の「小泉八雲」を読み比べました。そして次回は『赤い鳥』に掲載の小泉八雲の話（他の作家のもの）を読んで見ようということになりました。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日に刈谷市中央図書館で開催）
平成30年1月12日（金）午後1時半～3時半
『森三郎童話選集　かささぎ物語』掲載作を順に読んでいきます。
「狐」「夕顔物語」「馬方八五郎」